同窓会会報
第45号
平成2年7月5日ヨ
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
〒319-03　TEL 0292-59-2811
振替口座　宇都宮3—1632番
印刷所
佐藤印刷株式会社

学園の昨今と学生募集の協力依頼

教務部長　西村典夫

今年は交代と思っておりましたが、引続き近況報告や協力依頼を致すことになりました。

一、卒業式　三月六日(火)

本科生(園芸コース六十一名、畜産コース十九名、生活栄養科十四名)計九十四名。普及専攻科生(園芸二十二名、畜産六名、食物五名)計三十三名。合計百二十七名が卒業致しました。

二、入学式　四月十六日(月)

本科七十七名(園芸畜産六十四名、生活十三名)、専攻科三十四名(園芸二十六名、畜産四名、食物四名)計百十一名。本科三年編入一名を加えると、合計百十二名が入学致しました。

三、教職員の移動

①退職　関　正治教授(定年)

近秀次嘱託教授(交代)、古賀康夫講師(一身上の都合)、井上律子助手(結婚)

②採用　関　正治嘱託教授(農業経営担当)神谷雪子助手(調理実習担当)

③昇格　佐藤　尭(助教授から教授に)、川井　光(同)、津田　渉(講師から助教授に)

④科主任等の移動　佐藤　尭教授(園芸コース主任に)、川井　光教授(生活栄養科主任に)、中野光志教授(畜産コース主任、兼図書館長に)

⑤非常勤講師　田村武夫先生(茨大教授)法学。上田　稔先生(茨城工専名誉教授)数学・統計学。今井清人先生(専修大博士課程終了)文学。坂田由美子先生(東京女子大英米文学科卒)外国語。飯村紀美彦先生(前茨城県農村研修館長)農業簿記学。川嶋鉄三郎先生(前農水省中国農試)園芸経営学。高橋　清先生(前茨城県食品試験所長)食品学。ケン・ロミオ先生(アメリカ・ライス大卒)外国語。須田哲也先生(茨城県農協中央会・学園十六期生)農協簿記学。

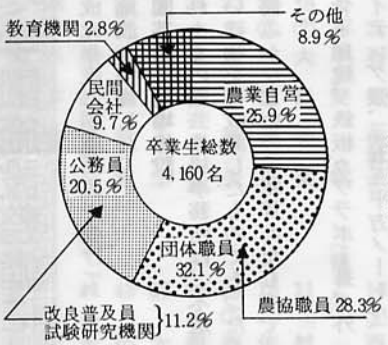
四、学生募集協力依頼

平成二年度の本科応募者数は八十七名、平成元年度の百五名、昭和六十三年度の百五十七名に比べ、激減しております。学内で、種々検討分析いたしておりますが、対応できる分野で全力を尽すべく、例年より二ヵ月余り早く、募集活動を開始、教職員も万障繰合せて、全国各地の卒業生の皆さん、高校訪問等を行い、平成三年度の学生募集にご協力をお願いしたいと計画いたしております。前記今年の本科入学生七十七名は、出身高校別では普通科五十六%、農業科三十八%、工業科など六%。県別では茨城の十名、長野八名、沖縄五名、千葉・新潟・島根など各四名、その他はさらに少く、宮城・三重・滋賀・京都・大阪・奈良・鳥取・岡山・広島・香川・高知・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎の十七府県からの入学生は皆無でした。どうか、ご子弟は勿論、ご親戚、お知合い、或は出身高校や所属農協、普及所、役場等々あらゆる方面に働らきかけ、一人でも多く、ご推薦をたまわりたくお願い致します。又、同窓会の支部会のご計画等ございましたら、出来る限り参上しますのでご一報下さるよう、お願い申上げます。

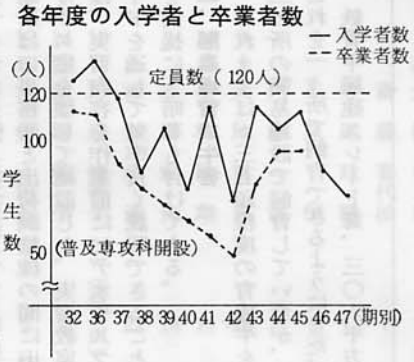
五、カリキュラムの検討など

本科四年制一貫教育を目指して、差当って本科一～二年の見直しを始めております。種々の制約はございますが、座して死すよりは動いて活路を開きたいものであります。皆様方の積極的なご参画を願上げます。

本科卒業生の就業動向(平成2年7月現在)



各年度の入学者と卒業者数



分収林を視察して

常任委員長　高橋　隆三

去る三月二十六日、渡辺会長の提案で、本会育林事業の分収林を視察した。同行したのは、渡辺会長をはじめ、栃木の本田常任委員、事務局の関常任委員、それに高橋の四名であった。

「本会の事業として育林事業をとりあげ、それに踏み切った以上、分収林に魂を入れたい。」を口にする会長の行動の現れ、先は現地の視察となった次第である。

本会の日立市小木津山分収林は、常磐自動車道日立北インターを出て、西へ走ること五キロ、十万分の一の道路地図に載っている不動滝の近くにある。学園からの道程は、学園から水戸インターまでが約九キロ、常磐自動車道区間が四十二キロ、日立北インターから先が約五キロで合計五十六キロ、車での所要時間は、ゆっくり走って一時間である。

分収林の現況は、一口にいって、その道の専門家とも任ずる本田氏の弁を借りれば、生育は不良とのことであった。分収林は山の南斜面に三・三ヘクタール、沢づたいに走る林道から二分の一位上がったところまでが、急斜面で杉、それから尾根にかけては比較的ゆるやかな勾配で、桧が植えられている。植林初年度に、旱魃のため桧の相当数が枯れ、補植したためか生育にむらがある。隣地は一年早く植林した分収林であるが、順調に生育しており、それからしても、数年後には立派な山林になると予想できた。当然のことながら急斜面の杉は生育が悪く、表土の深い林道近くのものは、写真のように大きく生長していた。

管理の様子は下刈が不十分のようで、特に灌木の高刈が見受けられた。高萩営林署の造林計画によれば、下刈終了年次になるが、本年度も下刈は欠かせないようだ。もう少し丁寧な管理をして、魂の入った山林にしたい、が視察した一行の一致した感想であった。

視察して間もなく開かれた常任委員会において、七月二十八日、私達の手で下刈実施を決めた。四十年記念事業として育林事業が取り上げられ、候補地の選定から植林に至るまで、直接関係した者の一人として、会員の協力により立派な分収林になることを願う。

学園施設整備について

平成元年度に国庫助成を受けて、次の二施設を整備した。

一、園芸農場現場施設

これまでの園芸農場事務所は、木造の古い建物を移改築したものであったが、傷みがひどいので建替えたものである。

鉄骨平屋建。鉄板カワラボー葺。外壁サイデング張、二五三平方メートル、場所は旧事務所と出荷調整棟の間に旧ガラス室を壊して建設した。実習教室は、実習内容を作業前にビデオやスライドを通して効率良く説明できることを前提に、暗幕も付けてある。

二、酪農場育成牛舎

これまでは、三五頭程度の育成牛を三ヶ所の簡易施設で飼育していたが、これを一ヶ所で飼育できるようにした。

鉄骨平屋建スレート葺、三〇六平方メートル、場所は新旧成牛舎の間。

育成牛を生育ステージごとに収容でき、飼養管理の徹底が可能となり良牛の育成が期待される。

わが分収林の下刈にご協力を

―森林浴そして汗を流して懇親―

期　　日　七月二十八日(土)十時頃より
集合場所　鯉淵学園九時集合
　　常磐線小木津駅十時
懇親会　下刈終了後場所を変えて実施
携帯品　下刈可能な身仕度・弁当・鎌
　　（会で準備）

茨城支部大会
盛大に開かれる

同窓会員の一割を占める茨城支部では、長らく活動を停滞していたが、渡辺新会長の同窓会活性化活動に歩調を合せるべく、昨年暮より準備会を重ね、去る四月二十一日鯉淵学園で支部大会を開催した。

はじめに、松本作衛農林漁業金融公庫総裁(元農水省事務次官)の「農業をめぐる内外の情勢とこれからの経営戦略」と題する記念講演が二時間あり、支部会員(五三名)及び学園職員、学生など百余名が感銘を深くした。

休憩後支部総会となり、四期の中村恵一氏を議長に選出し、次の事項を決定した。

一、支部組織の充実強化、県内を五ブロックに別け、分会設置
二、新規約の承認、会費年千円
三、会員名簿の作成、配布
四、本部同窓会活動への参画
五、研修会・親睦会等の開催
六、新役員の選出　次の方々です。

支部長、岩持文彦(七期)副支部長、分会長を兼ねる。県北、市野沢弘(十)。県央、松田暄信(七)。鹿行、浅田昌夫(十四)。県南、長谷川久夫(二十二)。県西、増山勝(七)。事務局長、松田暄信。

（松本作衛氏講演要旨）

「農業をめぐる内外の情勢とこれからの経営戦略」

一、農業をめぐる内外の情勢

日本農業は、戦後の食糧輸入に支えられながら、逐次、生産力を向上してきたが、やがて、農産物を国内生産と国外依存に二極分化しつつ輸入依存度を増し、アメリカの農産物を主とした輸入大国となり、著しく自給率を低めている。そうした中で、最近、ガットの場では農産物自由化が論議され、アメリカの完全自由化、ECの保護政策の段階的解消、日本の基礎的食糧の自由化反対が提示され、農産物自由化問題は、ガットの仕組の中で、その方向が決定されようとしている。

国内では、米の過剰化対策が転作割当とからみ、大きな問題となっている。

これまで日本農業の中心である米生産は、消費量の減少をみながらも、なお、カロリー計算では二十六%という高い比重を占めている。しかし、外国の産米と比較すると、美味ではあるがコストが高い（アメリカの五～七倍）という弱点をもつ。そうした意味では、最も進んでいるといわれる米作も、外国との対比では著しく遅れているといえる。これは、生産量の七十%を零細兼業農家により占められるという規模問題に起因している。

したがって、これからは、食管制度を維持しつつ、いかにして体質を強化していくかが大きな問題である。

二、これからの経営戦略

これからの課題は、改正された法制や資金制度を活用しながら、米作を中核農家に集中し、規模拡大とコストダウンを図ると共に、転作を含む土地利用型農業の確立とその担い手育成が急務である。

そのためには、国土狭少、高地価、高地代、低賃金、土地の資産的保有化、農業専従者の高齢化という条件をふまえ、農業労働力の半数を占める婦人労働力の積極的な協力と参加を得ながら、米以外の農産物の商品化、とくに健康食品、グルメ、料理簡便という消費者のニーズに対応した少量多品目生産を志向し、食品産業との結合強化、農産物の高付加価値化、有利な販売方法の選択、地域農業システム化、担い手とそのまとめ役の育成など、多面的な経営戦略の確立が重要である。

（文責　事務局）

来賓宿舎の焼失について

総務部長

五月十八日、午後四時十分頃出火、同四十分頃までに全焼しました。

来賓宿舎は(八五、一平方メートル)茅葺平屋で背が高く、腰は赤煉瓦模様の漆喰壁で、人々の印象に残っている建物でした。特に古い卒業生には、良く利用したこともあって、懐かしい建物の一つであったようです。

そんなことから、前和田会長は、これを修復して残したいと努力されましたが、学園の修繕費捻出が思うに任せず、最近は茅葺き屋根の傷みひどく、雨漏りしかかっておりました。

管理者として、ご報告すると共に、失態を起こしたことを深くお詫び致します。学園としては、再びこの様な事故を起こさぬよう、職員学生共々心を引締め合っているところであります。

遠山　操氏（三期生）農林水産大臣から「功績表彰」を受賞される

遠山操氏は、昭和二十三年三月本学園卒業後、甘藷研究所、茨城県農業改良課を経て、二十五年六月、農水省に奉職され、農業技術研究所生理遺伝部、そして三十八年四月からは、農事試験場畑作部、畑作研究センター、農業研究センターの各業務科長として活躍され、試験研究のサポート分野で数々の業績をあげられました。農林関係試験研究機関の筑波移転後は、一日も早く試験研究に供される圃場整備が必要とされており、遠山操氏は、そうした要請を一身に受け、筑波の新墾畑地を対象に、「精密試験研究用畑作圃場の設計・造成と均一度向上技術の開発」に取り組まれ、新しい考えと手法に基づく作業効率の高い試験圃場の設計、統計学的、科学的な均一度判定手法の確立、土壌均一化のための作物選択・栽培法改善、農業機械改良、土壌改良等の諸技術の開発と適用により、圃場均一度を著しく向上させ、農業試験研究の発展に大きく貢献されました。この功績が高く評価され、昭和六十三年四月七日、数少ない農林水産大臣賞を受賞されました。情報入手が遅れ、皆様へのお知らせも遅れてしまいましたが、ここにご紹介するとともに同窓生一同で心からお祝い申しあげたいと存じます。

（事務局）

〝秋田鯉学子　県南有志の集い〟開催される！

五期　鈴木重雄

秋田県出身の鯉渕学園卒業者は現在九十三名で、県内の公務員（国・地方）、県内各農協、各連合会職員、自営等に励んでいる現状です。現支部長は四期の広島実（旧姓榊田）氏で、公私多忙の身でありながらも支部会務にご盡力下され、感謝の極みであります。

小生が千葉農試から秋田農試にユーターンした昭和三十二年頃は、同窓生も殆んどが顔見知りで、何かと集まり易く、同窓会が開かれていましたが、会員が次第に増加し、しかも、その去就がなかなかつかめず対策に苦慮しながらも、一年一回位は支部幹事方のご配慮で秋田市に集合するのが唯一の楽しみとなって来ておりますが、若年卒業者達の参加は相変らず途絶えている現状です。

さて、学園四十一期生の中嶋浩之君（大曲市）の結婚式が本年二月二十四日、鯉渕学園の関　正治教授ご夫妻の御仲人で大曲市のホテルで行われるとの情報をキャッチし、「この期に県南有志の同窓会を」と七期佐藤和男氏、二十四期の武藤恒美氏、二十八期の寺井純子さんとも連絡をとり、「表題の集い」を計画、二月二十四日午後五時より横手市内のホテルで開催する運びに漕ぎつけました。関先生は、披露宴に同席した六期鈴木、七期佐野氏と同伴し駆けつけて下され、十六名が関先生を囲んで歓談いたしました。寮歌、応援歌の斉唱に始まり、学園近況報告や出席者より近況報告があり、お互いの思い出に花を咲かせ、時間の経過するのも忘れる位でした。

最後に、総会についてのお願い。総会というからには、記念講演や研究成果発表会等を開き、地方支部からも多数参加し、関係者で農政や農業問題についての認識を向上させるべきと思います。学園卒業生は農業関係者の熱い視線で注目されています。現状に対応していける人材をどのようにして養成するかを真剣に論じ実行する時期が今ではないでしょうか。是非実施して下さい。

（一部文章割愛・事務局）

（出席者）⑥鈴木重雄　⑦佐野和男　⑧伊藤清之助　⑩小西三治　⑭西田貞夫・武藤恒美　⑮鷹田道之助　⑲伊藤富男　㉓河村正孝・鈴木みよ子・藤原雅記　㉘寺井純子　㉜佐藤忠道　㊳佐藤学　学園　関正治

事務局長の交替について

同窓会事務局内の都合により、五月から坪野（七期）に交替しました。しかし、教授職の上に総務部長も兼務しておりますので、どこまでご期待に添える仕事ができるのか、心許ないところですが、出来るだけ頑張りたいと思っておりますので、皆様方のご支援ご協力を切にお願い致します。

とっても楽しかったクラス会

89鯉淵学園第七期生常陸野集会報告

平成元年十月十四日、秋晴れの好天に恵まれた鯉淵学園に、全国各地から昔の友達が集ってきた。その数、四十三名。この学園を離れて三十七年、ぽつぽつ現職を退りぞく世代となった七期生の面々である。

昭和二十七年三月、二年間お世話になった学園を巣立って、全国に散ったまま初めての訪問者もいる。十年毎の寄り合いを約束し、各地区持ち回りの費用プール制を採用して昭和三十七年五月、名古屋で開催した第一回集会から数えて五回目を迎えた。その間、四十七年四月の笠間、五十三年四月は学園、六十年七月科学博を目玉として筑波を舞台にそれぞれ展開したが、いづれも三十名足らずの参加で終っている。

七期生会の現況は、物故者十名、行方不明者五名を除いた八十一名で構成される。サンパウロに移住した鳥取の加藤は別格として、全員集合を目指しているのが、茨城在住の十一名で組織する「鯉淵学園第七期生会開催実行委員会」の意気込みなのだが、毎回の不振が悩みの種だ。

その悩みを吹き飛ばしてくれたのが、今回の企画である。六十三年八月、霞が浦の湖畔石岡・高浜で委員会を結成以来、何回も会合して綿密に計画し、全員に情報を流しては相互に連絡し合い、誘い合うよう気運を高めたことが幸いしたものと評価している。欠席通知と一緒に、二十四名からの近況報告、次回出席を約束してきたことも心強い限りだ。

とにかく、四十三名集合した。三十七年振りに参加した十名は、珍客中の珍客である。顔付と名簿が符合しないまま、早速、同窓会館で始った全員協議では、同窓会活動の活性化に議論が集中し、各県支部組織の確立と、会員参加の工夫で話題がつきなく、結論持越しで記念撮影、学園見学と目まぐるしく、昔時と著しい変貌に目を見張りながら、第二会場の笠間「山の荘」へと移動した。

夕食を兼ねた懇親会には、石橋先生、近先生、砂田先生のご臨席をいただいて、昔のこと、今のこと、仕事の話しが次々に飛び交い、三十七年間の出来事が、一夜のうちに集約された次第。中でも、土間に、犬走り式渡り廊下で連なる飯場型学生寮での生活が、きのうの如く蘇って話題を盛上げる。大浴場に端を発したインキン騒動、緊急避難措置として登場したドラム缶露天風呂の人気、洗面器すき焼きパーティーに芋ちゅう乾杯。西瓜どろ収穫祭文化祭体育祭と数限りない。しまいは、参加できなかった友達へと思いが馳せる。会って語り合い、飲み明かしたい願望が募る一方だ。二年間、一つ釜の飯を喰い、同じ屋根の下で寝起きした仲間同志の性なのか。この願望が果される時、楽しさが幾倍にも跳ね反ってくる反面、代償として、別れる時の物悲しさ、淋しさを覚悟しなければならないだろう。

こうした仲間の心情とは裏腹に、時計の針は猛スピードで駆け巡る。終曲(フィナーレ)が近付いた。

最後は、寮歌の登場である。全員立ちあがり、スクラムの輪となった。吾を呼び、吾友を呼ぶ。雲を払い、新生の日も呼んだ。そして、握りたる、この手の温み忘れめや……と、くりかえしくりかえし絶唱、若き日の思い出に蘇った仲間達は、元気はつらつ、五年後の再会を胸に秘めて常陸野を後にした。

閉幕である。懸案の同窓会活性策は、茨城在住グループに一任され、その後の経過は、会報四十四号及び四十五号関連記事のとおりである。

平成二年四月十五日には、茨城在住十一名が集り、退職者を励ますと共に、第六回集会準備を話合った。取りあえず行方不明者の追跡から行動を起すことをお伝えして、89鯉淵学園第七期生常陸野集会の報告とする。

同窓の皆さん、次の者の情報をおもちの方は、是非、同窓会本部までお寄せ下さい。

山崎道夫(福島)　古川好男(福島)
交告正義(岐阜)　吉田辰夫(佐賀)
下田　晃(熊本)

〔相川 吉沢(田代)〕　立見　村山　岸岡　松井　本田　山下　竹嶋　坪野　中島　下里　佐々木　寺尾
渡辺　三浦(清)　佐野　清水　原田　鈴木　小泉　三浦(一)　矢沢　奥田　伊東　増山
岩持　松田　栗林　山中　広原　斉藤(茂)　内藤　斉藤(武)　足立　関口　落合　加藤　中村　佐藤　黒崎　浜田　大島

千葉県支部からの報告

二期　剣持義虎

名簿によれば、千葉県内に住んでいる卒業生数は百三十数名。東京のベッドタウン化しているので、東京支部へ入っている人もあって、支部の人数は必ずしも明確ではない。

年齢の幅は、面相から察するに、頂上は六十数歳、土台は二十一、二歳ということになろう。職業は、農業に精を出している人を始めとして、農業関連の従事者が多い。人によって生き方は色々あって面白く、誠に味のある考え方の人がいて、議論も活発に交される。

今回集った人は二十名、会長を加えて二十一名であった。

この度は、渡辺会長にお越しをいただき、学園の近況やら同窓会の動向、会長の抱負などをお聞きすることができて、誠に有意義な支部会であった。

曲り角だ、曲り角だと、追いまくられているうちに、何だか迷路に迷い込んでしまった。群の中の利口そうな一匹が、「これを行ったら屠殺場だ」というから、引き返そうと振り向けば、妖怪がつっ立って「ノー業」「々々」と呼んでいる。夢を見た。それで農業の群から外れて一人都会へ行ってみたが、キラキラ「派手」が舞っていて、快適さは全くない。酒には酔うが人には酔えないざま。広々とした家と緑と花一杯のふるさとが忘れられないでいつも頭にこびりついている。嫁さえいれば、婿さえあれば都会なんかに執着はないと思いついたら心は逸るばかり。男は女を攫って嫁にし、女は男を攫って婿にして、それを土産にとっとと平和なふるさとへ帰って来た。そんな連中がこの集りには幾組かいる。嫁がない婿がないと泣きごとの明け暮れでは甲斐性のない奴だと言われても仕方のない時代だ。「俺の心が平和で、女房も家族も達者で楽しく農業が好きだと言っているのを、他人に鬼や角言われる筋合いはない」と彼等は堂々と言ってのける。そんな奴の面魂は不敵で人生の重みを感ずる。

学校というところはそういう類の素地をつくるところかも知れない。そのためには学生は何にも恐れない人間になるために一生懸命勉強しなければなるまい。車を飛ばして日々うつつを抜かしているような奴は御免蒙りたいもの。鯉淵学園はどうか知らないが二流、三流の大学にはそういう輩がいる。

昔々「乳と蜜の流るる郷」といった言葉があって心がなごんだものだ。せせこましさは戦争時代と変らない今だ。

どうだろう。学園の許しを得て、花一杯、くだもの一杯、乳と蜜はこぼれ落ち、四季を誇る日本一の学園づくりは夢がある。やがて砂漠の都市からも人はやってくるだろう。夢と思いをこめて酒を呑んだ次第。

（出席者）②剣持義虎・本間信一・斉藤省三・江草恵・黒川善吉 ③川原富夫・奥村勇資 ⑦岸岡昇 ⑩杉本守城・西村璋三 ⑫鈴木信雄 ⑬池田勝夫 ⑱石田佐登美 ⑲卜部泰郎 ㉑小出文子 ㉔加藤成一・郡司喜代子 ㉝池田直志・根本悦夫 ⑦渡辺正信（会長）

不知火会（熊本県支部）意気軒昂

畜産コース主任　中野光志

不知火海に面する熊本県支部では、新年を迎えた正月の最終日曜日に支部会が開催されています。たまたま正月末日に熊本県酪連の乳質改善講習会への出席の機会があり、九州入りを早めて、この不知火会へ出席させていただき、同窓生各位の意気軒昂ぶりを御報告します。熊本県支部会員は総数五十九名。支部発足は昭和二十五年以来とのこと。また会場が二十八期卒の田端氏が経済連から脱サラで開業された〝友宝〟と定められてることもあって出席者も過半数に達して盛大です。今年は、〝友宝〟が更に改築増設とあって、名物の馬刺しなど盛宴で、今頃は新装開店で万客後をたたない盛況だと存じます。

熊本のスイカ・メロン・イチゴは日本一であって、その推進力は学園卒であること。酪農も今秋、熊本で全国共進会が開催されるわけで、卒業生も多忙を極めていますが、多くの学友達の火の国熊本への御来訪を望まれています。

出席者の主力が卒業期一ケタの大先輩で、市長や各界の重鎮の座におられる方々で、母校の現況や将来展望に、「四年生大学」などの声をいただきました。なかには、食前作業などの懐古談もあり、宮島先生は熊本の出身でもあり、近況を尋ねられました。

人事院ＯＢの村田先輩（現在、福岡県在住で、〝ばってん会〟開催準備のた